

研究ノート

## 「山へ取上候」の意味について

－ 関ヶ原本戦は決戦（決勝会戦）だったのか追撃戦だったのか －

白 峰 旬

### 1. 関ヶ原本戦について記した近衛前久書状

戦国時代における武闘派の公家として有名な近衛前久が、慶長5年（1600）9月15日の関ヶ原・山中の戦い（以下、関ヶ原本戦と略称する）の5日後の9月20日付で子の信尹に送った書状には、関ヶ原本戦やそれに関係するいろいろと重要な記載がされている。

近世史研究で著名な藤井譲治氏が陽明文庫に所蔵されているこの前久書状の原本を調査して、その原本写真、活字翻刻とともに、記載内容の詳しい考察を論文「前久が手にした関ヶ原情報」として発表された。

この前久書状に、「大垣城の軍勢である石田三成、島津義弘、小西行長などが（9月14日に徳川家康が大垣方面へ押し寄せたのを）見て「山へ取上候」と記されている。

この「山へ取上候」（「取」は接頭語）という記載を文字通り解釈すれば、「大垣城に在城していた石田三成、島津義弘、小西行長などの諸将が大垣城から移動して山へあがった」と解釈できる。

「山へあがった」というのは、大垣城から移動して山中（現岐阜県不破郡関ヶ原町山中）という場所に布陣したことを意味しており、山中は地形的には山地であるので、「山へあがった」という記載は表現としては正確である（白峰旬「関ヶ原本戦について記した近衛前久書状」）。

このように、石田三成、島津義弘、小西行長などが地形的には山地である山中という場所に布陣して、徳川家康方軍勢を迎撃したことは、石田三成などの諸将が家康方軍勢に対して決戦（決勝会戦）を挑んだ、ということになる。私はこれまでこうした解釈をしてきた。

### 2. もう一つの解釈（劇的な解釈の変化）

ところが、「山へ取上候」には別の解釈が可能なのである。戦国史研究で著名な藤木久志氏の著書『新版雑兵たちの戦場』には「城あがり・山あがり－村の避難の2つの型」という小見出しにおける文章の中で「敵軍に襲われた小田原一帯の人々は、「城入り」といって、領域の中心にある領主の城に避難し、遠くの住民は「山入り」といって、山間に逃げ込んだ」（下線引用者）という事例が紹介されている。

さらに同書では、元龜3年（1572）7月に織田信長軍が「近江の草野川の溪谷（滋賀県浅井町）に攻め込み放火すると、近里近郷の百姓らが「当山へ取り上」った」（下線引用者）という事例も紹介されている。

要するに、敵軍が攻めてきて山へ逃げ込む事例が戦国時代には見られ、それを藤木氏は「山あがり」と総称したのである。

また、藤木久志氏の別の著書『戦国の村を行く』には「敵軍に襲われた時に村人たちの取った、③山入り、④山中に引き退く、⑤深山に引き籠る、⑥山へ取り上る、⑦山林に交わる、藪山にかくれるという、一連の「山入り」の行動」（下線引用者）という指摘がされている。

つまり、「山へ取上候」とは、山の上に避難する（或いは、山の上に逃げる）という解釈になる。とすると、上述の近衛前久書状の解釈は劇的に変わってくるのである。

よって、「大垣城に在城していた石田三成、島津義弘、小西行長などの諸将は、(9月14日に徳川家康が大垣方面へ押し寄せたのを)見て大垣城から移動して山の上へ避難した(或いは、山の上へ逃げた)」という解釈になる。この場合、「山」というのが比喩的表現であるとすれば、必ずしも、地形的に高い場所へ逃げた、という理解は必要ないかもしれない。

この解釈が成立すると、石田三成などの諸将は、家康が江戸から大垣方面に出陣してきたのを見て、大垣城から出て、家康方軍勢との決戦（決勝会戦）を避けて退避した、ということになる。

ということは、関ヶ原本戦は、大垣城から退避した石田三成などの諸将の軍勢を家康方軍勢が一方的に追撃した追撃戦だった、ということになる。

上述の近衛前久書状には、この合戦では、家康方軍勢が即時に切り立てて、大利（大勝利）を得た、と記されていて、一方的な追撃戦であった、と解釈した方が、前久書状における文脈的には整合する。

このように、前久書状における「山へ取上候」の解釈は、関ヶ原本戦が決戦（決勝会戦）であったのか、或いは、一方的な追撃戦であったのか、ということを考えるうえで、決定的なカギとなるのである。

これまでの通説では、関ヶ原本戦は天下分け目の決戦（決勝会戦）であった、と理解されてきたが、関ヶ原本戦が決戦（決勝会戦）ではなく、当初から一方的な追撃戦であったことになると、関ヶ原本戦が短時間で決着したことも納得できる。そして、大垣城から退避した石田三成などの諸将の軍勢が短時間で殲滅され、その殲滅された場所が山中という場所（山中は関ヶ原より西方に位置する）だった、ということになる。

### 3. なぜ追撃戦になったのか

なぜ家康方軍勢による一方的な追撃戦になったのか、という理由を考えると、家康方軍勢と大垣城から退避した石田三成方軍勢の圧倒的兵力差であろう。家康方軍勢が大垣城から退避した石田三成方軍勢を捕捉して殲滅したのが関ヶ原本戦の真相であったとすると、両軍の兵力差で決着が付いた可能性が高い。

石田三成などの諸将が大垣城を出たのは、後日、豊臣公儀の軍勢を結集して家康方軍勢との決戦（決勝会戦）をするために、大垣城から出て上方（大坂城）へ向けて一旦退避しようとしたのであろうか。上述したように、山中は関ヶ原より西方に位置するので、大垣城から退避した石田三成方軍勢が上方へ向けて移動しようとしたことの証左になる。

関ヶ原の戦いの家康方軍勢の陣立書（「大関家文書」）によれば、家康方軍勢の「御先備」は4万余人であった。これに対して、大垣城から退避した石田三成などの諸将の軍勢の兵力数は、島津義弘、小西行長、宇喜多秀家については、従来の軍役規定人数よりも少数だった可能性が高い。

家康方軍勢の陣立書（「大関家文書」）によれば、「御先備」の諸将は、先頭から4列横隊－2列縦隊－1列横隊

「山へ取上候」の意味について－関ヶ原本戦は決戦(決勝会戦)だったのか追撃戦だったのか－の順で行軍する形になっていて、横隊を主軸に行軍することにより石田方軍勢との遭遇戦に即応できた(包圍殲滅できた)と考えられる。

ちなみに、陣立書は一次史料であるが、布陣図は後世の二次史料しか存在しないので、史料価値としては当然、陣立書の方が史料価値が高い。陣立書は各軍勢が行軍する(つまり動態)ことを前提に作成されているが(端的に言えば、主君から諸将に対しての行軍命令を可視化した命令書)、布陣図の評価で危険なのは、各軍勢が布陣したまま止まっている(つまり静態)ように錯覚して見えてしまう点(行軍するように見えない点)である。

その点は、関ヶ原本戦を考察するうえでも留意すべきであり、特に野戦の場合、諸将の軍勢は戦場に固定・静止しているわけではないので(索敵行動をおこない敵の軍勢に遭遇して戦うまでは常に前進していると想定すべきであろう)、二次史料の布陣図ではなく一次史料の陣立書をもとに動態としての行軍行動(行軍の導線)を考えるべきである。

#### 【参考文献】

藤井譲治「前久が手にした関ヶ原情報」(田島公編『禁裏・公家文庫研究』第六輯、思文閣出版、2017年、後に、藤井譲治『近世初期政治史研究』、岩波書店、2022年、に収録)

藤木久志『新版雑兵たちの戦場－中世の傭兵と奴隷狩り』(朝日新聞出版、2005年)

藤木久志『戦国の村を行く』(解説・校訂清水克行、朝日新聞出版、2021年)

野村玄『新説徳川家康－後半生の戦略と決断』(光文社、2023年)

白峰旬「関ヶ原本戦について記した近衛前久書状」(日本史史料研究会監修、白峰旬編著『関ヶ原大乱、本当の勝者』、朝日新聞出版、2020年)

白峰旬「関ヶ原の戦いの陣立書(「大関家文書」)について」(『史学論叢』52号、別府大学史学研究会、2022年)

#### 【付記①】

上記のように考えると、関ヶ原本戦における小早川秀秋の裏切りの時間(タイミング)や場所(小早川秀秋が松尾山城に布陣したということは一次史料では確認できない)をどのようにリンクさせて考えるべきなのかという問題が出てくるが、その点については今後の課題としたい。

#### 【付記②】

前掲・拙稿「関ヶ原の戦いの陣立書(「大関家文書」)について」では、家康方軍勢の「御先備」について「先頭から5列横隊－3列横隊－8列横隊－3列横隊－2列縦隊－5列横隊の順で行軍する形」と記したが、筆者(白峰)の「横隊(おうたい)」に関する意味のとらえ方について誤りがあったため、本稿では「先頭から4列横隊－2列縦隊－1列横隊の順で行軍する形」に訂正する。

#### 【付記③】

美濃国の正保国絵図(『岐阜県史』史料編、近世1、岐阜県、1965年発行、1980年再刊行、別冊附録「美濃・飛騨国絵図」、岐阜県立図書館蔵)を見ると、美濃国不破郡内の中山道のルート上の村は、東から西に向かって、赤坂村－昼飯村－大墓村－青野村－垂井村－野上村－関ヶ原村－松尾村－藤下村－山中村－今須村というようにに所

在していて（※赤坂村、垂井村、関ヶ原村、今須村については、文字が不鮮明なため、天保国絵図美濃国〔国立公文書館デジタルアーカイブ、請求番号・特 083-0001、<https://www.digital.archives.go.jp/item/764299.html>〕により村名を比定した。上記の村の所在位置の順番は両図とも同じである。なお、大墓村は天保国絵図では青墓村と表記されている。）、山中村の隣村の今須村から先は近江国内に入るルートである。よって、山中村は今須村の次に近江国に近い位置にあることから、大垣城から退避した石田三成方軍勢が近江国へ抜ける寸前の位置で家康方軍勢に捕捉されたことになる。美濃国の正保国絵図を見ると、山中村がいかに近江国に近い位置に所在しているのがよく理解できる。

#### 【付記④】

合戦場としての「山中」について、小和田哲男「関ヶ原研究最前線」（『関ヶ原研究会寄稿集』、岐阜関ヶ原古戦場記念館発行・編集、2024年、4～5頁）において「この、戦場を山中とする説に対しては、その後、笠谷和比古氏が『論争 関ヶ原合戦』（新潮選書、二〇二二年）で反論しており、この「山中」を字名としての「山中」ではなく、山間部を意味する「山中」とみるのが正しいように思われる。」と指摘されている。「山中」を字名と解釈するのか、或いは、山間部（つまり一般名詞）と解釈するのかという問題については、この合戦関係の書状で、その用例を検討する必要がある。「（慶長5年）9月15日付伊達政宗宛徳川家康書状」（中村孝也『徳川家康文書の研究』中巻、日本学術振興会、1958年、697～698頁）では「於濃州山中及一戦」、「（慶長5年）9月25日付井伊直政宛結城秀康書状写」（大石泰史編『井伊直政文書集』（戦国史研究会史料集5）、戦国史研究会、2017年、65～66頁）では「去十五日、濃州山中ニ而、合戦被成」と記されている。この2つの事例では国名（「濃州」＝美濃国）の次に「山中」と記されていることから、「山中」は字名と考えるべきであろう。一般名詞の山間部という意味であれば、「濃州之山中」と記されるはずであるが、そのようには記されていない。「（慶長5年）9月28日付伊達政宗宛結城秀康書状」（『伊達家文書之二』（大日本古文書）、東京帝国大学、1908年、710号文書、243～244頁）では、「去十七日ニ、さを山へ山中より取かけ、則乗取申候」と記されている。9月17日に佐和山城（石田三成の居城）へ「山中」より（家康方軍勢が移動して）攻めかかり、佐和山城を乗っ取った、としている。この場合、「さを山」（＝佐和山）は地名（字名）であるから、「山中」も地名（字名）と考えるべきであろう。以上の理由から、私見では、「山中」は一般名詞ではなく字名と解釈している。

#### 【付記⑤】

関ヶ原本戦についての最新の論考としては、水野伍貴『関ヶ原合戦を復元する』（星海社、2023年）、水野伍貴「関ヶ原合戦の戦場は、「山中」か「関ヶ原」か」（渡邊大門編『戦国史の新論点—平成・令和の新研究から何がわかったか？』、星海社、2024年）があり、関ヶ原本戦に関する最新の研究史整理を含めた論考としては、高橋陽介「石田三成はなぜ関ヶ原へ向かったのか」（『城』236号、東海古城研究会、2024年）があるので参照されたい。